

『雲南彝族の支系形成と漢人移住』

東京都立大学人文科学研究科史学専攻 修士課程
野本 敬

はじめに

雲南～8c 半ば南詔国成立以来(後身の大理国・後理国含)約500年にわたって独立を保持
元朝征服(1253)以後中央の版図に編入、中国西南の一地域として現在に至る

今日の雲南省; 漢族人口 > 非漢民族人口

- ・どのようにその逆転現象が起こったのか
- ・漢族増大の中非漢族集団はどのようにして今日あるような集団として形成されてきたのか

問題意識

現代の情況・今日に至る漢族/中央 非漢族集団間の関係を考えるには、
漢族の移住が急速に増大した明代以降を端緒とするのが適当

明代における彝族の支系(サブグループ)集団の歴史的形成過程～

明代雲南地域における彝族(口口)社会の様態と中央王朝進出に伴う漢人の移住・地域的展開に伴う彝族支系の歴史的形成への影響をさぐる

使用資料

中国王朝側の地方志・風俗・種人条の記載を主要な手がかりとする

先行研究

尤中～彝族支系の来歴の相違を指摘

方国瑜～支系・地域毎の差異に着目

江応樑・李中清～中国内地よりの移民

漢人入植の過程

明代の中央からの漢人移住

異民族反抗の鎮圧、辺防のための強制的性格を持った屯田制の形態

家族同伴～全体で100万人以上が入植と推定

人口の多くが平地(壩子)に設置された府州県・衛所及びその周辺の屯田という形で定着

定着の具体的様相～不明確

各州縣における戸口やその周囲に展開された屯田の数値よりある程度の人口的压力を推測

		正徳雲南志	天啓滇志
雲南府	戸	16,583	29,550
	口	144,704	128,276
楚雄府	戸	7,023	10,210
	口	73,541	101,131
武定府	戸	2,969	3,145
	口	48,908	28,775
澂江府	戸	4,161	6,002
	口	35,263	28,535
尋甸府	戸	1,070	1,221
	口	18,732	21,424

明代雲南

人口の大多数を非漢族が占め、内地から移住した漢人は平地の都市・衛所周辺に止まる内地からの流入人口の来歴～各地からの多様なもの(中国全土からの軍事投入、家系の分析による)

理念としては「南京遷徙伝説」等に典型的であるように、漢人集団は当時の文化的先進地帯・江南を志向しており、実態はどうあれその主観的認識としては「漢人」であった。

雲南地域における口口の動向

地域設定

口口の分布範囲は広範囲にわたるため、本稿では雲南府・楚雄府・武定府を対象地域として設定したい。この3地域は隣接していながら統治体制は流官直接統治・流官土官併用・土官主体と異なっており、地理的条件でも平地比率の多寡が存在する。また今日の彝族支系の分布でも異なる方言群/自称を異とする集団群が会う地域であり、かつ雲南統治の中心に近く入植漢人の圧力も大きいため、集団間の相違が現れやすい地域と考えられるからである。

	雲南府	楚雄府	武定府	澂江府	尋甸府
壩子数計	21	12	5	9	4
面積計	1701.5	395.9	211.0	686.8	138.3

(面積は判明分のみ。)

雲南口口集団

明代の雲南統治では、府州県設置の内地と土司主体の夷地といった差異があるが、口口集団は元江以北の地域、即ち内地地域に分布しており、山地民族的形態(四川地域の獮羅と類似:黒貴・白賤、奴隷制度)平地農耕民的形態(黒白区別無し、漢化傾向大)など地域的・生業形態等の相違が確認できる。特に雲南境内では主に府州県設置地域周辺に分布していることになり、交易等を通じ漢人との接触も比較的あったと考えられる。

雲南口口集団は四川・雲南・貴州連接地帯の集団とは異なる(かつ当時既に漢化の進んでいた白人とも異なる)集団が居住しており、生業形態も平地居住、社会性質も異なる集団が存在していた。

雲南府の場合

中心に近く入植漢人の圧力も大きいため、集団間の相違が現れやすい地域と考えられる。

雲南府(流官直接統治地域): 明朝統治の中心, 衛所・屯田・官署の最重点整備地域

漢人流入最多

漢文化の浸透も著しく、明末までには中央と同等の文化程度を誇る

集団名称	生活領域	生業形態	事項
撒弥獮羅	滇池上諸州邑皆有之	居山者耕瘠土、販薪于市 濱水者浮家捕魚	無盜賊
白獮羅			漸習王化、同于編氓
黒獮羅			安寧・禄豊、多負鹽于途、老者任華人二人之力、壯者任一牛之力
普特	昆陽州州近滇池	得魚輸税 / 有瀕池捕魚者	

他地域では「在夷為貴種、凡土官嘗長、皆其類也」(滇志)と称されるこの集団も、滇池周辺では漢人に使役される対象として描写される。

当地の口口集団は山岳地帯だけでなく滇池周辺のような平地にも分布しており、生業形態も既に平地民的性格であり、その社会的性質も非戦闘的なもので、他地域の集団とは異なったものであった。特に平地居住の集団には強力な独自の社会組織は解体され存在しておらず、結果中央からの漢人の統治・文化的圧力には受動的であり、漢人の統治の優越下で次第に混住しつつ漢人同様に統治・使役される状態に置かれることとなった。

楚雄府の場合

楚雄府(半流半土地域)

主な形勢として平野部には今日の白族・漢族の先民、山間部に彝族先民が分布していたとされる。

集団名称	生活領域	生業形態	事項
羅婺	山林高阜処	牧畜主体	近年亦有富者、納粟為義官及作生員者、其俗漸同漢焚矣
撒摩都	「定遠之民」		「白羅羅之類」 近年以来、稍變其故俗、而衣服飲食亦同漢焚、更慕詩書、多遣子入学、今亦有中科第者
祉蘇/山蘇	居于山巔	耕山、種蕎麥	性強悍、多為野賊
洒摩			亦近漢、知讀書
摩察			「黑爨之別種」 其性遇強則畏遇、弱則凌

しかし実際口口集団の分布は必ずしも豁然としたものではなく、山地型集団「羅舞」等が独自の社会・習俗を強固に維持し中央統治には回避的傾向を示していた一方で、平地型集団「撒摩都」では土官として中央統治に協力するばかりか集団レベルでも漢文化に親和的で、風俗習慣のみならず科挙に参加するまでに変化していた。

武定府(土官地域)

雲南北部に位置し、地理的に川滇黔连接地帯の山地型集団と隣接して近縁関係にあり、明朝進出以前から地域権力として強い勢力を保持していた。漢人も当地の口口集団の強固な勢力下に容易に進出できず、漢人の移住・漢文化の注入が本格化したのは土官が廃止され中央の直轄統治下に入って後の事である。当地の土官階層は一定程度漢文化を移入したものの、集団レベルでは基本的には独自の社会・習俗を強固に保持し、容易に変化せず、全体としては中央の支配も末端までは手が及ばなかった。

集団名称	生活領域	生業形態	事項
黑羅羅		耕田弋山	俗尚強悍。其強悍為三十七部之最。 近建学校之後、旧習漸遷狡猾難治
羅婺			在夷為貴種 凡土官嘗長、皆其類也

婦襲夫職

漢化の実際

口口集団の被った漢化の内実～独自の社会・政治組織が中央王朝のシステム内に編入され、変化していく過程

儒教化(儒教理念の浸透)という側面

雲南においても統治の初期段階から儒学が設置

	州縣名	設置時期	(西曆)	挙人(人)	進士(人)	社学数	書院数
雲南府	雲南府	洪武17	1384	696	63		2
	昆明縣	弘治17	1504			31	
	富民県	萬曆48	1620				
	宜良県	正徳4	1509				
	羅次県	萬曆21	1593			1	
	晋寧州	洪武16	1383				1
	(歸化県)	嘉靖14	1535			1	
	呈貢県	弘治7	1494				
	安寧州	洪武16	1383				1
	禄豊県	嘉靖21	1542				1
	昆陽州	永楽元	1403			1	
	(三泊県)	降慶4	1570				1
	易門県	萬曆25	1597				
	楊林社学					1	
	嵩明州	洪武年間					1
澂江府	澂江府	洪武16	1383	91	7	1	3
	江川県	嘉靖45	1566			1	
	陽宗県	萬曆18	1590			1	
	新興州	隆慶元	1567				
	路南州	嘉靖35	1556			1	1
楚雄府	楚雄府	洪武17	1384	88	3		3
	楚雄県	弘治17	1504			2	
	広通県	嘉靖25	1546			1	
	定遠県	嘉靖26	1547				1
	(定辺県)	成化8	1472			1	
	(嘉県)	嘉靖30	1551			1	
	南安州	洪武27	1394				1
	鎮南州	永楽7	1409				
武定府	武定府	降慶4	1570	5	0		1
	(禄勸州)	萬曆27	1599			1	
尋甸府	尋甸府	正徳9	1514	3	0	2	1

天啓滇志卷之八・九 学壙志より作成。()付地名は社学又は書院の地点・年を示す

目的～「以変夷風」

雲南府・楚雄府など漢人の多く入植した地域ではその設置も早い～文化的圧力も大きい

結果平地居住型口口では科挙参加や風俗の改変が起ったのではないが非漢人独自の社会が強固に存在している武定の場合、その設置は遅れ、科挙に合格する人材も稀な状態であった。

土司に対してはその子弟を学校に入れ、儒学教育を施すことを義務づけ、土官階層を中心に漢文化の摂取が行われた。

また、明代口口社会には、特有な現象として女首長の存在がある。女土司は彝族系と目される

土司に圧倒的に多く出現しており、史書にも口口社会独自の社会習俗として記載が有る。武定においても五代にわたり女士司を輩出した。しかしこれらの女士官は清代に入ると、ほとんど姿を消してしまう。これは土司地域内に儒学を設置することからくる漢族の影響(儒教的秩序理念)がおよんだ結果と考えることができるのではないだろうか。

口口集団固有の習俗の変化；

明朝進出時既に相当の集団的差異を内包していた口口集団であるが、漢人の流入・接触によりその置かれた地域的条件や性質上の差異から、更にその相違が増大することとなった。

しかしこうした変化は決して中央(漢) 辺境(蠻)という方向だけではなく、交易などの接触を通じ、火把節といった土着の習俗が逆に入植漢人に取り入れられた事例も見落としてはならない。

おわりに

以上で確認された点

「口口」集団内部の多様性～雲南では元来異なる存在形態の集団が分立していたが、漢人により「口口」と総称され、それらの集団間の相違は居住環境の相違、漢人との接触の多寡により更に拡大していった。結果その一部は「漢族化」し、民として編籍され口口としては目立たなくなったであろうし、その一方影響をうけつつも独自の集団として継続してきた口口も後代の「漢化」の進んだ口口や独自色の強い集団など一層のバラエティを持つこととなった。

こうした明代の大量の漢人の移住に対する個々の羅羅集団の置かれた政治的・地域的状況の相違及び、それに対する対応/選択の差により従来からの口口集団間の相違が一層拡大し、今日の支系を形成してきたといえる

また、このことは今日の「彝族」が明清代の「口口」と呼ばれた集団を一民族として識別したことから内部には多くの相違の大きい下位集団を包含しており、近縁他民族との「差異」の境界の問題をも考える視角を提供する。

漢化(漢族の文化装置を採用すること) 漢族化(漢族への同化)間の差異境界

非漢族側の論理

個々の口口集団について、彼ら自身の意識変化の問題

以上の現象が非漢族の一方通行的漢化のプロセスとみなせるかといった問題～今後の課題

課題

- ・なぜ明代に急速に中央勢力の浸透が可能となったのか～民族社会側の変化の可能性
- ・口口以外の近隣諸集団(僂、力些、窩泥等)との関係、影響
- ・口口集団間の紐帯は何か、「口口」と定義づける要素は何か

主要参考資料

- 『大理行記校注 雲南志略輯校』李京・郭松年撰,王叔武校注,1986年,雲南民族出版社
『景泰雲南圖經志書』續修四庫全書
『正德雲南志』(上・下),周季鳳纂修,天一閣明代方志選刊統編版,上海書店
『萬曆雲南通志』李元陽(東洋文庫藏)
『滇畧』,謝肇淛纂輯,四庫全書珍本三集版
『滇志』劉文澂撰,古永繼点校,王云・尤中審訂,1991年,雲南教育出版社
『雲南史料叢刊(第三卷)』方國瑜主編,徐文德・木芹纂録校訂,1998年,雲南大学出版社
『雲南史料叢刊(第四卷)』方國瑜主編,徐文德・木芹纂録校訂,1998年,雲南大学出版社
『雲南史料選編』李春竜主編・楊名鏜副主編,1997年,雲南民族出版社
降慶『楚雄府志』(静嘉堂文庫藏)
嘉慶『尋甸府志』天一閣明代方志選刊
康熙『雲南府志』(東洋文庫藏)
康熙『宜良県志』(東洋文庫藏)
康熙『武定府志』(東洋文庫藏)
康熙『楚雄府志』(東洋文庫藏)
乾隆『新興州志』(東洋文庫藏)
道光『昆陽州志』(東洋文庫藏)
『広志繹』王士性撰,1981年,中華書局
『武定鳳氏本末筆証』何耀華著,雲南民族出版社,1986年
『滇雲歷年傳』倪蛻輯・李埏校点,1992年,雲南大学出版社

文献

- | | | |
|------------------------|--------|------------------------------|
| 尤中 | 1979 | 『中国西南の古代民族』雲南人民出版社 |
| | 1994 | 『雲南民族史』雲南大学出版社 |
| 方國瑜 | 1984 a | 『彝族史稿』四川人民出版社 |
| | 1987 | 『中国西南歴史地理考釋(上・下)』中華書局 |
| 龔蔭 | 1992 | 『中国土司制度』雲南民族出版社 |
| 雲南省編輯組 | 1986 | 『雲南彝族社会歴史調査』雲南人民出版社 |
| | 1990 | 『大理州彝族社会歴史調査』雲南人民出版社 |
| | 1985 | 『昆明民族民俗和宗教調査』雲南民族出版社 |
| 江応梁 | 1990 | 『中国民族史』(下)民族出版社 |
| 鳥居龍蔵 | 1990 | 『中国の少数民族地帯をゆく』朝日新聞社,朝日選書 162 |
| 西田龍雄 | 1980 | 『俣羅譯語の研究』松香堂 |
| 曾昭掄(八卷佳子訳) | 1982 | 『中国大涼山イ族区横断記』築地書館 |
| 毛里和子編 | 1998 | 『周縁からの中国 民族問題と国家』東京大学出版社 |
| 何耀華 | 1988 | 『中国西南歴史民族学論集』雲南人民出版社 |
| 村松一弥 | 1973 | 『中国の少数民族 その歴史と文化および現況』毎日新聞社 |
| ドロウヌ(矢島文夫・石沢良昭訳) | | |
| | 1968 | 『シナ奥地を行く』白水社 |
| 白鳥芳郎 | 1981 | 『華南文化史研究』六興出版 |
| 胡慶鈞 | 1981 | 『明清彝族社会史論叢』上海人民出版社 |
| 謝劍 | 1987 | 『昆明東郊的撒梅族』中文大学出版社 |
| H・R・デーヴィス(田畑久男・金丸良子編訳) | | |
| | 1989 | 『雲南 インドと揚子江流域の環』古今書院 |

「仙人の会」4月例会(2001年4月22日:東京学芸大学)

陳士林・辺仕明・李秀清編著

1985 『彝語簡志』民族出版社

牧野巽 1985 『牧野巽著作集第五卷 中国の移住伝説 / 広東原住民族考』
御茶の水書房

論文

李中清 1983 「一二五〇年 - 一八五〇年 西南移民史」
『社会科学戦線』1983 - 1

江応樑 1986 「明代外地移民進入雲南考」
『中国移民史略』田方・陳一筠編, 知識出版社, 1986年

栗原 悟 1982 「明代彝族系土司にみられる種族連合の紐帯
彝族(口口・ノス系)の民族史的研究の一考察」
東南アジア 歴史と文化 No.18

奥山憲夫 1996 「洪武朝の雲南平定戦(二)」史朋 28号
1997 「洪武朝の雲南平定戦(一)」
東方学会編『東方学会創立五十周年記念東方学論集』

林謙一郎 1995 「元代雲南の段氏総管」『東洋学報』第78巻第3号

松田孝一 1980 「雲南行省の成立」『立命館文学』418 - 421号

李中清 1983 「1250年 - 1850年西南移民史」社会科学戦線 1983 - 1

松田孝一 1980 「雲南行省の成立」立命館文学 418 - 420号

松本光太郎 1995a 「雲南省の彝語支諸集団の民族識別をめぐる(上)」
東京経済大学人文自然科学論集第99号

松本光太郎 1995b 「雲南省の彝語支諸集団の民族識別をめぐる(下)」
東京経済大学人文自然科学論集第101号

小門典夫 1994 「涼山彝族の口誦詩にみえる漢族のイメージ」
国立民族学博物館研究報告 19巻4号

資料

譚其驤主編 1982 『中国歴史地図集(元・明時期)』地図出版社

《雲南省》編纂委員会編 朱恵榮主編

1994 『中華人民共和国地名詞典 雲南省』商務印書館

U.S.Army Army map service Corps of Engineers

(1955 -) 『Topographic Map World Scale 1:1,000,000・1:250,000』Washington

(国立国会図書館蔵)

雲南省地理研究所

1989 『雲南省地理』(中国地理叢書)雲南教育出版社